

# 大学図書館問題研究会 京都

京都市左京区吉田本町

京都大学教育学部図書室

(竹村心気付)

TEL 075-751-2111 (内3013)

— 南波浩氏の紫式部論 —

## 女に生まれたために父を嘆かせた紫式部 何故女ではいけないのか

竹本文夫  
(同志社大学)

### はじめに

源氏物語とか紫式部とかいえば、日本人なら知らない人はいない。しかし、作品そのものはめったに読まれないといわれている。なんとなく平安時代の優美な恋の物語といった印象であろうか。

シェークスピアやスタンダールの作品を読むといっても人はおどろかない。が、源氏物語を読むというとびっくりする。そこで、源氏物語は、千年の昔に書かれた世界最古の長篇小説であるが、そのテーマは現代に通ずるナウイものである、というとさらにびっくりする。

そういったことは、私もよくしらなかったのであるが、京都国公婦人協主催の「紫式部集」読書会に参加し、講師の南波浩氏(岩波文庫「紫式部集」の著者)の話を知っているうちに、紫式部が、どんな境遇で、なにになやみ、どうたたかったかを、少しずつ知り、大変感銘を受けた。以下その一部を紹介する。

### I 紫式部集にみる娘時代

紫式部というと、あの才気煥発の清少納言とは反対の、内気で控えめな人、しかし人の批評はけっこうしんらつにする、なんとなく陰性の女性といったイメージが一般的なようである。これは、多分に「紫式部日記」の影響だと思われる。「日記」には、「<sup>いち</sup>」という字もしらないふりをしたとある。

紫式部には、「源氏物語」「紫式部日記」とともに、あまり一般には知られていないが「紫式部集」という家集がある。この家集には、少女時代から晩年にいたるまで、彼女のほぼ全生涯の歌が集められている。したがって、紫式部の人柄、性格を理解する非常に有力な手がかりになる資料でもある。

この「紫式部集」の娘時代の歌をみると、先に書いた普通のイメージとは違った、彼女の姿が見られる。たとえば

かたが  
方違へにわたりたる人の、なまお  
ぼおほしきことありて、帰りにける

つとめて  
早朝、朝顔の花をやるとて  
おぼつかない それかあらぬか 明け暗れの  
空おぼれする 朝顔の花  
この歌は、<sup>かたが</sup>方違えに彼女の家に泊った男が、  
夜中、彼女の部屋のあたりで何か不可解な振舞  
舞（のぞき見と思われる）をしておきながら  
翌朝なにくわぬ顔で帰って行ったので、その  
男をとっちめてやろうとして、早速、皮肉を  
こめて朝顔の花を贈り「帰りぎわの、あの空  
とぼけた朝の顔は何ですか」と詰問した歌で  
ある。いかにも率直で勝ち気、行動的な感じ  
である。女から先に男に歌を贈るなどという  
ことは、ほとんど考えられなかった時代であ  
ることを念頭におけば、よけいその点がはっ  
きりする。

また、貧乏法師が形だけ陰陽博士のかつこ  
うをして河原で抜いをし、金もうけするの  
を見て娘らしい潔癖感から、痛烈に批判した歌  
もある。あるいはまた、越前の武生にいて雪  
に閉じ込められていたとき、側近の者たちが、  
何とか彼女をなぐさめようとして、大きな雪  
山を作ってくれたのに、その好意を充分知り  
ながら、都へ帰れるわけでもないからつまら  
ない、と見にも出ない、そんな歌もある。

「紫式部集」冒頭の歌は

早うり、童友達なりし人に、年ご  
ろ経て行きあひたるが、ほのかにて、  
七月十日のほど、月にきほいて帰り  
にければ

めぐりあいて 見しやそれとも わかぬ間に  
雲隠れにし 夜半の月影  
有名な百人一首にとられている歌である。恋  
の歌と思っている人が多いようであるが、詞  
書きにもあるように、幼な友達に数年ぶり  
であったのに、ゆっくり話をするひまもなくそ  
の友が帰ってしまったので、なごりをおしん  
でうたった歌である。

姉なりし人亡くなり、又、人の妹う

しなひたるが、かたみに行きあひて、  
亡きが代りに、思ひかはさんといひけ  
り。文の上に、姉君と書き、中の君と  
書き通はしけるが、おのがじしとほ  
き所へ行き別るるに、よそながら別  
れをしみて

北へ行く 雁のつばさに ことづてよ

雲の上がき 書き絶えずして

姉を亡くした紫式部と、妹を失った友達と  
が、たがいに亡き人の代りに姉妹になろうと  
約束し、手紙の上書き（宛名）に「姉上へ」  
「妹へ」と書き交わしていたが、それぞれ、  
父の赴任にともなって遠くへ旅立つことにな  
った。逢って別れを惜しむことができなかつ  
たので手紙で別れの挨拶をした。「北へ行く  
雁に託してください。今までどおり、お手紙  
を絶やさないで。」

このように「紫式部集」にみる娘時代の彼  
女は、友情にあつく、率直で明るく、勝ち気  
で、積極的、行動的な人間であった。これが  
紫式部がもって生まれてきた本来の気質であ  
ったと思われる。

## Ⅱ 幼少時における父の嘆き

「紫式部日記」によると、父為時は、祖父  
以来の歌壇の名門の出自であるという自負を  
もち、自分の才能に適した「詩文の家」をお  
こそうとして、学問にはげみ、また、自分の  
後継者として年少の長男<sup>のぶのり</sup>惟規に漢籍を熱心に  
教えていた。それをそばで聞いていた幼い紫  
式部が、兄よりもよく理解し、記憶したので  
「この子が男でなかったのが、我が家の不幸  
だ」と常に嘆いたとある。

当時は、王朝貴族はなやかな摂関政治の時  
代であるから、官位は、どんな家に生まれた  
かによって大体きまってしまう。紫式部の家  
は、よくて「受領<sup>ずりよう</sup>」という地方官の地位にし  
かけない家柄である。しかし、「詩文」で

大成すると出世の可能性がなきにしもあらずであった。父為時の、長男惟規に対する漢籍の教授は、彼の「家名」をあげたい執念と結びついていた。だから「お前が男の子に生まれていたら、きっと自分の志をついで立派に『詩文の家』の念願を果してくれたらうに、残念だ、不運だ」という父の嘆きは、その執念の表現であり、それだけに、幼少の紫式部に、よくはわからぬまでも、非常に強く作用したに違いない。しかも、父のこの嘆きは、一度や二度ではなく「常に嘆かれはべりし」だった。

### Ⅲ 父の嘆きが与えた影響

「紫式部日記」のこの父の嘆きは、いかに彼女の頭がよかったか、という話として受けとられてきたが、そんな自慢話としてではなく、幼少時における「忘れがたく、書かずにはおられない」痛切な彼女の体験として語られているとみるべきである。

「お前が男でなかったのが、我が家の不幸だ」と常に云われる — こんなショックなことがあるか。

父の嘆きの原因は、自分が「女」に生まれたことにある。そのことが父に不幸感を与えている。父にそんな嘆きを抱かせる自分は何という不幸な存在だろう — こうして、自己卑下の意識、劣等感の意識が芽ばえてくる。同時に、当時一流の「詩文家」であった父から、認められ、たのもしがられた、という優越感も、この嘆きは与えていったのである。

以後、彼女は、この二つの意識の葛藤のなかで成長していく。順調のときは優越感が前面に、逆境のときは劣等感が前面にでながら。

### Ⅳ 「女」では何故いけないのか

「紫式部集」を見ると、娘時代は、父為時に暖かく見守られ、親しい友人達にも支えら

れ、前に見たように、率直、勝ち気、行動的で積極的といったように、彼女本来の自意識や優越感が優勢であった。

宣孝のぶたかとの結婚時代も、夫宣孝が彼女の才能を認め、おおらかに引きたててくれたため、やはり、自意識や優越感が優勢だったようである。

しかし、結婚して二年半もたたないうちにより理解者であった夫宣孝を伝染病で失い、彼女は、はかりしれない打撃をうける。「宿世すくのつたなさ」が痛感され、それからくる劣等感が支配的になってくる。当時は、宿世がつたないということは、前の世の業因が悪かったためということで、同情ではなく、さげすみだったのである。

こうして紫式部は、幼少時の父の嘆きを、再び痛切に考えずにはいられなくなる — お前が男でなかったのが、我が家の不幸だ — 何という「宿世」か。自分は何のために生まれてきたのか。女では何故いけないのか。自分は女として生まれてきてしまった。では、どう生きたらよいか。そして一体「女」とは何であるのか。女に生まれたくて女に生まれたのではない。それこそ「宿世のさだめ」である。では、その「宿世」とは何か。人間の運命とは何か。人間とはそもそも何なのか。こうした問題をさぐりさぐり書いたのが源氏物語である。

### Ⅴ つらい宮仕え

こうして書き始められた源氏物語は、たちまち評判となり、彼女は、藤原道長から父為時を通じて、中宮彰子のところへ女房として出仕するよう要請される。いやでしょうがないが、最高権力の命にはさからえない。

道長は、入内じゅだいさせた娘、彰子のサロンに天皇の関心をひきつけようとして、スターをそろえた。彼女は最高級のスターであった。そ

してまた、事実上、彰子の家庭教師でもあった。

当時の社会は、すべて生まれた家の家柄できまるのであり、後宮における女房の地位も当然そうであった。しかるに、紫式部は、たかが「受領<sup>ずりよう</sup>」の娘であるにもかかわらず、破格の待遇で道長に迎えられたのである。当然他の女房たちから白眼視された。

ものを云えば云ったで、知識をひけらかしているといわれ、黙っていればいるで、源氏の作者だと思ってお高くとまっているといわれた。こうして彼女は、今度は「身の憂さ」とともに「身の程」もいやというほど味あわされる。門地、家柄の低さゆえの「宿世のつたなさ」である。そして自衛のために「一」の字もしらないふりをして押し通すことになったのである。

夫宣孝の死による打撃にくわえ、意にそまぬ宮仕えは、娘時代のあの明るい、率直な、勝ち気で行動的な彼女を大きく変えていったのであった。それとともに父の嘆きが発端となった彼女の問題意識も成長していった。紫式部は、さまざまな人物にたくし、女とはなにか、女では何故いけないのか、女はどう生きたらよいのか、女のしあわせとはなにか、そして人間のしあわせとはなにかを、鋭く、深く、しつように、源氏物語のなかで追求していったのである。

### おわりに

以上南波浩氏の紫式部論の一部を、私なりの理解であるが、紹介させていただいた。私には、この南波氏の視点を知って、はじめて、

紫式部にほんとうに共鳴するとともに、彼女の偉大さにふれうるように思った。千年前の平安時代 — 本名も生没年も、女性ゆえに記録すらない時代に、中国や日本の文化を一身に吸収し、男性も到達できなかった最高峰に達していた紫式部が、あの男性本位の一夫多妻の社会で、どんな思いで、どう生活したのか、じつに、察するにあまりある。

真の男女平等をめざし、働く者のしあわせをめざしてたたかっている現代の我々にとって紫式部から学び、うけつぐべきものは多い。

### 参考文献

- 南波浩校注 紫式部集（岩波文庫）1973
- 南波浩著 紫式部 「日本の思想」  
上巻 1980. P. 31-57 新日本出版社  
簡潔に氏の見解の全体がわかります。
- 南波浩著 紫式部集全評釈 1983. 笠間書院、氏の蘊蓄のすべてが注ぎこまれた「紫式部集」研究の決定版です。  
(上記三つの本はすべて市販されています)
- 南波浩著 紫式部の意識基体  
「同志社国文学」5・6合併号、1971. P. 36-54.

南波浩氏による

#### 紫式部集・源氏物語読書会

- 毎月第三金曜日 午後6時～8時40分
- 1986年3月位まで紫式部集、おわりしだい源氏にはいります。
- はじめての人でも写本が読めるようになります。
- 詳細は京都国公婦人協に問い合わせを  
—— 誰でも参加できます ——

大図研近畿5支部 新春合同講演会

レファレンスサービスの評価

講師：豊後レイコ氏

日時：1986年1月18日（土） 14:30～16:30

場所：大阪府立労働センター（天満橋）

参加費：500円